

SGH 東北復興防災研修を実施しました

2018年12月21日（金）～24日（月）の3泊4日の日程で、SGH 東北復興防災研修を実施しました。この取り組みは2014年度から毎年実施されており、今回で5回目となります。本年度は、高校1～3年のGLコース/GJクラスから選抜された10名が参加しました。

この活動の中では、震災後7年余りを経てなお影響の残る被災地のありのままの姿を「見て感じる」こと、そのような状況の中で復興に向かって努力を続ける人たちの声を「聴く」こと、知っているつもりになっていた震災の問題に対して当事者意識を持って「考える」こと、そしてこのような悲劇を繰り返さないために自分たちができる「行動を起こす」ことを目的としています。

本年度は5回の事前学習会を経たのち、福島第一原発周辺の広野町、檜葉町、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町、南相馬市、飯舘村、および福島市、二本松市、郡山市を訪れ、福島県立ふたば未来高等学校と福島県立福島高等学校の生徒とも交流を行いました。

一日目

①「みんなの交流館 ならは CANvas」訪問

まず訪れたのは、福島県檜葉町の「みんなの交流館 ならは CANvas」でした。この「ならは CANvas」は、地域コミュニティの核となるように、地域の様々な意見を取り入れながら作られた復興のシンボルともいえる施設です。ここでは、この施設内にある一般社団法人「ならはみらい」の職員として勤務する西崎芽衣さんにお話を伺い、施設内を案内していただきました。西崎さんは立命館大学出身で、学生時代には東北復興ボランティア団体「そよ風届け隊」を創設され、そのメンバーとして在学中に一年間休学し、檜葉町で復興支援に取り組まれていました。また卒業後は檜葉町に移住し、「ならはみらい」の職員として採用され、活動されています。



「復興とは何か」。西崎さんがまず問いかけたのは、まさに今回の研修の本質ともいうべき問いでした。「目に見える復興は進んでいるのかもしれない。しかし、心の復興はどうするのか」。それを実現すべく建てられたのが、この「ならは CANvas」だと西崎さんは言います。この施設を見学し、西崎さんのお話を伺う中で、まさにその「心の復興」というキーワードがこれからの四日間の活動の軸となるべく、生徒たちの心に突き刺さったようでした。

②「木戸の交民家」訪問 吉川さんの講話

その後、檜葉町の復興にあたってこの地域の復興・再生の拠点ともなってきた「木戸の交民家」を訪問しました。築 70 年余りのこの古民家は、生徒たちも口々に「このにおい、嗅いだことある」「おばあちゃんの家に来たみたい」というほど、どこか懐かしさを感じる雰囲気が残っていました。

ここでは、一般社団法人 AFW 代表理事の吉川彰浩さんにお話を伺いました。吉川さんは震災以前、東京電力の職員として勤務されており、福島第一原発での勤務も経験されています。震災当時は福島第二原発に勤務されていたそうです。しかし震災後に東電で勤務される中で「あんな事故を経験しないと気づけなかった愚かさ」を感じ、自責の念と共に、何とかこの町の復興を支えたいという思いから東電を退職され、この活動をされています。「次の世代にこの故郷を残していき、託していきたい」との吉川さんの言葉には、原発事故によって変わってしまったこの檜葉町を悲慘なままで終わらすわけにはいかない、自らが生きている間にしっかりと向き合いたいという思いが、ひしひしと伝わってきました。



吉川さんは震災後、世界史に残るような事故の中でしばらくはその責任を感じ、この町で楽しむことに罪悪感を覚えていたといいます。しかし、この町をしっかりと後世に残していかなければという思いから米作りやゲストハウスの開設などに関わることで、この町で真剣に遊んで楽しまなければという思いに変わっていったそうです。そしてその中で、事故のことやエネルギーのこと、それに依存している社会のことを多くの人に考えてほしいとの思いから、この活動を続けておられます。

「福島はたまたまわかりやすい場所だけど、実は大切なことは日常にあふれているんだよ」と吉川さんは言います。だからこそ福島から何を学ぶのか、この出来事から気づける何かを持って帰るためにしっかり考えて感じてほしいというメッセージを生徒たちに伝えていただきました。なお、この翌日から三日間、吉川さんは研修に帯同してくださいました。その中で、常にこの問いを発していただいたおかげで、生徒たちの心の中にも少しずつ変化が見られました。

③一般社団法人「ならはみらい」 西崎さん、森さんの講話

この日の夜は、最初の訪問地「ならは CANvas」でお世話になった西崎さんと、同じく一般社団法人「ならはみらい」で勤務され、今年立命館大学を卒業されて檜葉町に移住されて

いる森雄一郎さんにもお話を伺いました。生徒とも比較的年齢の近いお二人ということもあり、復興への熱い思いやご苦労された経験、檜葉町が直面する苦しい現状など「生」の声でお話ししていただく中で、生徒も熱心になってメモを取り、質問をしていました。

檜葉町は、2015年9月まで避難指示によって立ち入りが制限されていたところでした。だからこそ、普段当たり前に感じる日常の出来事を、一つひとつ作り上げていかなければならない状況にありました。その中で「当たり前を疑う」ことの大切さを学んだと、西崎さんは言います。「不便だが、モノがないからこそみんなで作り上げられる。自分たちが生み出せる楽しさがある」と語る西崎さんは、生き生きとして輝いて見えました。



また森さんは、もともと人としゃべることが苦手で、自分を変えるために積極的に「人と会えるようなことをしたい」と、大学時代に福島のボランティアに参加され、それが現在の仕事につながっているそうです。思春期にあり、他人とのコミュニケーションにも悩む時期の生徒たちは、森さんの思いにも非常に共感をしていました。

そんなお二人でも、この福島の現状を代弁することの難しさを感じ、いまだに悩み続ける



そうです。だからこそ、まずは顔と名前を覚え思い出すことで、福島との心の距離を近くしていくことが大切だと言います。そしてその中で、一つひとつの他人の「ストーリー」を語っていくことが大事であると、生徒たちに伝えてくださいました。生徒も初日から福島の現状を目の当たりにし、うまく自分の言葉にできない中で、それを乗り越えるヒントをつかんだようでした。

二日目

④J ヴィレッジ、檜葉町内見学

今回宿泊した J ヴィレッジは、サッカー日本代表も合宿を行う大型のナショナルトレーニングセンターです。しかし震災当時、ここは福島第一原発の事故処理の作業員が宿泊する拠点となりました。研修を共にしてくださった吉川さんも、「ここがなければ、福島第一原発の事故はもっと酷いものになっただろう」といいます。見渡す限り美しいこのサッカーコート一面に、当時は砂利が敷き詰められ、そこが駐車場や仮設住宅となり、白い防護服をまとった作業員の方々が行き交っていたそうです。しかし 2018 年 7 月に再オープンしたこの美しい施設からはもはやその跡形もなく、生徒たちは想像し得る限り当時の光景を重ね、そこにあるギャップに戸惑うばかりでした。

その後、檜葉町を一望できる天神岬の高台へ向かいました。この高台に行くと檜葉町を見渡すことができます。この地域には J ヴィレッジをはじめ、東京電力の援助によって作られた施設が多く存在し、震災前からのこの地域と東京電力の結びつきを見ることができます。震災以前、東京電力は「東電さん」と呼ばれ、地元の人から親しまれていました。その地形から漁港を作ることができず、わずかな田んぼと出稼ぎによって支えられていた貧しいこの土地に、東京電力の火力発電所や二つの原子力発電所は、雇用と潤いをもたらしていたのです。それが、東北電力管内の福島で、東京に送る電気を作るといういびつな構造を作りました。経済的に苦しむ地方とそれによって支えられる都会という現状に、人口減少の進む過疎地を抱える日本の縮図を見たような気がします。



⑤「東京電力廃炉資料館」訪問

福島第一原発の事故の悲惨さと、その後の復興状況を後世に伝えるため、2018 年 11 月にオープンしたのが東京電力廃炉資料館です。ここでは、福島第一原発での事故の状況やその後の廃炉作業の様子を、さまざまな資料やスクリーンをもとに、肌で感じることができます。また今回は、東電ホールディング株式会社福島復興本社の担当者の方から、事故当時か



ら現在に至るまでの進捗状況を直接伺うこともできました。そこでは、作業員の安全を確保しつつ、廃炉作業とともに地下水や雨水を含む汚染水をいかに処理していくか、その難しさを思い知りました。同時に、想像を絶する被害の大きさと、そこで働く人たちの懸命な姿に、思いを馳せることとなりました。

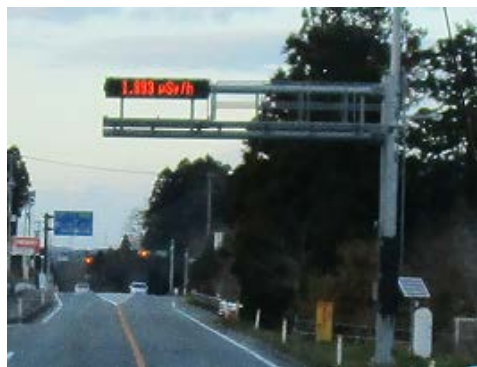
⑥「福島県立ふたば未来学園高等学校」訪問

その後、最初の交流校となる福島県立ふたば未来学園高等学校を訪問しました。同校は震災後の双葉郡の教育の復興を目指し、2015 年 4 月に開校した学校で、福島県内で最初に SGH に指定された学校でもあります。ここでは、SGH で活動されている生徒と交流をさせていただきました。まず、同校の復興に対する取り組みを紹介していただきました。また今回の交流では、本校の生徒もボランティアや観光復興、災害時の避難の問題点などのテーマで、震災についてそれぞれが事前に調べ考えてきたことをパワーポイントにまとめ、同校生徒や先生方に向けて発表しました。その中では、現地の方々に発表することを通じて、自らの震災に対する認識の甘さを痛感する生徒もいました。高校生同士、すぐに打ち解け合えるほどの和やかな交流になったと同時に、普段の高校生活では見えにくい他校の活動に接す

ることで、生徒たちは刺激を受けていたようでした。

⑦国道 6 号線通過、「浪江町立請戸小学校跡」見学

ふたば未来学園高校のある広野町から国道 6 号線を北上すると、いまだ一部が帰還困難区域に指定されている地域を通過します。そこは物々しいバリケードが広がり、窓を閉め切



った車でなければ走行できない場所でもあります。主を失いボロボロに黒く傷んだ住宅、地震で商品の木材がバラバラに崩れたままのホームセンター、もはや色さえも存在しないように感じてしまうそんな「人が消えた」まち…。筆舌しがたいほどのその光景は、まさに「あの日」から時間が止まったままでした。そして、ところどころに道路標識のようにある放射線量を示すの赤い数字は、不気味な光のよう

に感じました。見渡す限り背丈ほどの草が伸びただけの広大な海岸の土地は、震災前は住宅街が広がっていたそうです。津波にすべてを奪われ、まだあちこちに断層が残された道を進んでいくと、その中にポツンと一つたたずむ建物が浪江町立請戸小学校の校舎跡でした。鉄筋コンクリート二階建て校舎は、その一階が天井まですべて津波に襲われ、廃墟と化しています。その無残な姿に、生徒たちは言葉を失うほどの衝撃を受け、ただじっとその光景を見つめるしかありませんでした。振り返ると、その先にかすか見えるに福島第一原発が、何とも異様に映りました。



⑧「双葉旅館」宿泊 小林さんの講話

二日目は、南相馬市小高にある「双葉屋旅館」に宿泊しました。ここは震災後、立入禁止区域に指定されたため、旅館は一時中断することを余儀なくされたそうです。夕食後、この旅館を経営されている小林友子さんご夫妻から、映像などを踏まえ、震災当時の様子やその後旅館を再開していった思いなどを伺いました。

「南相馬はラッキーだった」。旅館の中断を余儀なくされてもそのような言葉が出てくることに驚きました。たしかに、原発からの風向きとは異なり放射線量も下がっていましたが、5 年余り旅館を再開できなかったその無念は計り知れないものだったのでしょう。それでも前を向いて復興していこうとする姿と笑顔に、こちらがエネルギーをいただいたような気がしました。

また小林さんは、震災後に南相馬を離れていった人たちへも「それぞれが自分のいる場所で頑張ってほしい」と語っておられました。震災後、新たな土地で新たな生活を始めた人たちは、いまだに故郷を捨てて逃げてしまったような後ろめたい感覚を覚えてしまうと言います。しかし、決して震災前の元の場所で生活できるようになることだけが復興ではないし、「そんな人たちがまたいつでも戻ってこれる場所を作っておかないと」と頑張っておられる小林さんの姿勢に、生徒たちも感銘を受けていました。



三日目

⑨「まるせい果樹園」訪問 佐藤さんの講話

三日目は、飯舘村の復興のシンボルとなっている「いいたて村の道の駅までい館」を經由して、福島市内の「まるせい果樹園」を訪問しました。ここでは、同園を経営されている佐藤清一さんからお話を伺いました。

まるせい果樹園は、幸い震災の直接の被害は受けませんでしたが、原発事故後の風評被害により、売り上げはその前年の1割程度まで落ち込んだそうです。しかしその中でも、「今がどん底、上にしかいかないのだから頑張ろう」と奮闘し、様々な工夫を凝らしながら懸命に努力されたとのことでした。現在では、食の安全や環境保全に取り組む農場に与えられるJGAPの認証も受けています。

震災で大変な思いをされてきた中で、佐藤さんは「ますます笑顔が大事と思えるようになった」と言われます。お会いしている間も笑顔を絶やさない佐藤さんに、こちらも元気をいただいた気がします。また同園では、新鮮なおいしいリンゴや食べ頃のラ・フランス、そのパフェをいただきました。美味しそうに頬張る生徒たちの笑顔は、まさに佐藤さんの大切にされている笑顔そのものなのだろうと、佐藤さんのそれまでの苦労にも思いを馳せる時間となりました。



⑩「福島県立福島高等学校」訪問

その後、二つ目の交流校となる福島県立福島高等学校を訪問しました。同校はSSHで本校と交流のある学校でもあります。ここでは、SSHで活動されている生徒との交流をさせていただきました。

まず、復興という視点でSSHのテーマに取り組まれている同校の活動をお聴きしました。原発事故により水産業がダメージを受けている中で、陸地での養殖を進めようと「ふっこうみどりうなぎ」の養殖に取り組んでいる研究や、生活の中での放射線量の調査・研究など、高校の学習の枠にとらわれないさまざまな研究は、非常に興味深いものでした。また本校生徒からも、復興に関する事前の調べ学習の報告をし、その後ディスカッションを行いました。



福島高校教諭の遠藤直哉先生は、ご自身も東日本大震災を経験された中で、これからの教育では「課題発見力」と「提案力」を身につけることが大切だと言われます。「これまでは理由を考えずに、結果だけしか学んでこなかった。そうやって点数をとってきた人たちが、あの震災でどう行動できたのだろう…」。そんな思いから、物事の本質を学べば他に応

用でき発想が広がるのではないかと考え、それが現在の同校での取り組みにつながっているそうです。ご自身の壮絶な震災経験から語ってくださったその一言一言が心に重く響きました。

⑪「福島男女共生センター」宿泊 長沢さんの講話

三日目は、二本松市内にある福島県男女共生センターに宿泊しました。ここは震災当時、避難所になるとともに、浪江町が役場機能を移すなど避難者支援の中心として機能した場所です。また、放射線の被ばくスクリーニング会場にもなった場所でもあります。その後、福島県内で初となる避難所内での女性専用スペースも開設されました。その際にさまざまにご苦労されたお話などを、福島県男女共生センター企画調査課の長沢涼子さんに伺いました。



避難所に女性専用スペースができたのは震災から約1か月後、「着替える場所がない」「男性の目が気になる」といった女性の声をキャッチしたことがきっかけだったそうです。災害時だからわがままは言っていられないと、女性や子どもなどを含めた社会的弱者の、かき消されてしまいがちな声にもしっかりと耳を傾けていく大切さを教えていただきました。またこれは決して女性だけの問題ではなく、「女性支援のことをきっかけに、障がい者や高齢者、LGBTなどの問題も考えてほしい」。長沢さんはそうも伝えておられていました。

四日目

⑫「富岡町 3.11 を語る会」語り部さんの講話

四日目は、郡山市へ移動し、「富岡町 3.11 を語る会」の語り部の方々にお話を伺いました。富岡町は福島第一原発のある大熊町の南に隣接し、現在も一部が帰還困難区域に指定されています。震災と原発事故で多大なる被害を受けた富岡町の現状と課題を伝えることで、「復興」のあるべき姿を後世に語り継ごうと、2013 年から活動をしているのがこの「富岡町 3.11 を語る会」の方々です。

「この世の終わりかと思った」。震災直後の様子をそのように語った言葉は、まさに東日本大震災の壮絶さを物語っていました。自分の故郷を置いて避難しなければならないその胸の内は、想像するだけでも耐えがたいものです。なかには 80 歳を超える語り部の方もおられましたが、優しい口調の中にも必死に伝えようとする熱い思いを感じ、心を打たれました。



今回の研修では、これまで震災のことについて知っていたつもりでも実際にはいかに無知であったかを痛感させられました。だからこそ、実際に現地に行って、見て感じることの大切さを実感したという生徒も多くいました。また今回、さまざまな方々のお話を伺うなかで、「被災者」や「支援者」という枠を超えて、同じ「人」同士で徹底的に向き合うことの大切や、「人」とつながることの尊さも強く感じていたようでした。

この研修はこれで終わりではなく、ここからが始まりでもあります。特に、近い将来必ず起こると言われている大地震に備え、その影響を少しでも抑えるために、それぞれの場所で自分たちのできるの行動を考えていく必要があるでしょう。また、昨年度のこの研修の参加生徒が、現在は立命館大学で東北復興ボランティア団体「そよ風届け隊」のメンバーとして活動している例もあります。きっと生徒たちの今後の人生においても、この研修は少なからず影響を与えることでしょう。

最後になりましたが、今回の研修に携わっていただいたすべての方々に、この場を借りて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。